

第5回気仙沼訪問報告書

平成25年5月3日～5月5日まで

作成 池永 憲彦

第五回気仙沼訪問報告書

1、期間

平成 25 年 5 月 3 日から平成 25 年 5 月 5 日まで 3 日間

2、視察都市及び視察先

- (1) 宮城県気仙沼市 市街地、鹿折、安波山、復興商店街、大島
- (2) 岩手県陸前高田市(一本松)
- (3) 宮城県気仙沼市・社会福祉法人キングスガーデン・佐藤春子理事長、山崎本部長、佐藤由美子事務長、臼井真人市議会議員・気仙沼南ロータリークラブ理事・税理士小山清之先生、男山酒造・菅原昭彦社長、復興商店街の方々、大島小学校 PTA 会長小野寺さん。

3、目的

- (1) 気仙沼義捐金を毎年行ってる大田原さん、湯浅さんご夫妻を気仙沼にお連れする。
- (2) 大田原さんの尾道ロータリークラブの卓話の資料制作。
- (3) 尾道の高原九年さんより預けていただいた、瀬戸内産のはちみつ 280 本をお届けする。
(有効活用場所を探していただく)

一日目

二泊三日間。第五回気仙沼訪問(私の中では帰郷)に行ってきました。

今回の目的は、私もずっと楽しみにしていた尾道のお世話になっている御夫婦の気仙沼訪問です。

このお二人は、尾道の浜中皮ふ科の浜中先生と同じく、毎年多額の義捐金を三年間送り続け、そのうちの二年は私に預けて下さいました。前回の気仙沼ユネスコの復興報告パーティでお渡しした義捐金は、今回は教育委員会にお任せし、気仙沼の大島小学校、中学校、鹿折小学校、中学校に届けられました。気仙沼小学校、中学校は、私の友人が同じ額の義捐金を手紙付きで預けてくれたので、ありがたい事に3校の小、中学校を応援する事が出来ました。

そんな窓口をさせていただいた事は、本当に嬉しい事です。尾道と気仙沼は市民レベルでお互いに協力し合い、復興に向けての関わりが深い街同士です。単発ではなく、復興だけが目的ではなく、10年、20年とずっと続いて行ける関係を目指して関わっている人が多いプロジェクトです。

そしてまた、その気持ちを精一杯返してくださる気仙沼ファミリーと尾道や、このプロジェクトに協力してくれる友人達との絆を生で感じる事が出来るのは、とても幸せな事だと思います。

今回の目的はただ訪問するだけではなく、尾道ロータリークラブの卓話(発表)に、気仙沼の報告をしてくださるとの事で、その資料作りを含めた視察でした。その目的がある事で、イベントよりも情報収集に集中出来たのが良かったです。このお二人との気仙沼訪問はとても充実したものとなりました。



尾道から気仙沼までは約 1200 キロ。朝 9 時に出発して飛行機で到着は 15 時半。気仙沼の社会福祉法人キングスガーデンの佐藤由美子さん、山崎正信さんが一ノ関まで迎えに来てくださった。まずはキングスガーデンに御挨拶。もうここは HOME なので帰ってきたらほっとする。そしてその後に日が暮れないうちに気仙沼視察へ。



気仙沼の街は、来る度に少しずつ変わっている。他の被災地に比べて民間レベルでの動きが早いと聞いた。地盤沈下した事ですぐに盛り土をし、水路を作ったり新しい栈橋を作ってフェリーの発着が出来るようにしたのが効して、カツオ、さんま、マグロなどの生魚の水揚げは早く動き始めたのかと感じる。

カツオに関しては、この状況で水揚げ日本一になったのは驚異的な事実で、気仙沼の人達の力を感じる。それでも問題はまだまだ多く、港近くの浸水場所はまだまだ時間がかかりそうだ。

2013 年 5 月 3 日写真



2011 年 4 月 4 日写真



今は、地盤沈下と住宅再建はかなり深刻な課題。自分の家がいつになったら再建されるのかの見通しもつかない状態。一般には三年後と言われてるが、その通りになるかどうかの保障はないとの不安を抱える人も少なくない。仮設住宅にも「期限」があるので、いつ出なければいけないかわからない不安を抱えたまま、現在にいたります。住宅再建の方法は3つ。ひとつは自力で再建、2つめは「防災集団移転促進事業」の制度を使う事。その場合は高台に移転しなければなりません。3つ目は災害公営住宅を待ち、そこに入居する事。高台に移動の場合は土地の整備も来年以降なのでまだまだ先の話になります。

現在は建設業界は業者待ちの状態がずっと続いているので、新築物件はとても難しいです。そこでの問題は、先ほど述べた地盤沈下。これから住宅、工場を再建するのに盛り土をしなければならなく、それが工場で1.8M、住宅なら3.5Mもかさ上げしなければ再建の許可が下りないとの事。しかも早くするならそれは自分でしなければいけないらしい。

補助金もあと一年で打ち切りだし、かさ上げをしないと補助金も出ないしという所で焦りを感じている人が多い。しかも、土台、鉄骨がまた厄介でそれを取り外さないと建物が建たない。これらの問題が現状起きている状態で復興予算の流用問題が起きるなんて、信じられない話である。気仙沼市は現在人口、約 69,000 人で、震災前に比べて約 5,000 人減少したそう。市役所に届けてない人もまだ沢山おられることから、まだまだ減少はしているとの事。でも、今在住されている方々は海と向き合い、自然との共存の姿勢で未来をみつめている人がほとんど。その気持ちを見守り、政府は気仙沼、大島を6Mの防潮堤で囲うつもりだ。大島を囲ったら、ほぼ要塞。気仙沼は陸前高田と違って高台が近くにあるので、逃げ道を優先する方が先だという意見がほとんどである。そんな想いを浮かべながら、安波山へ向かった。

安波山は、標高 239M の気仙沼の「航海の安全と大漁を祈願する」という由来から名づけられた港町気仙沼のシンボルです。元々は、ここから見える気仙沼の風景と、尾道の風景が瓜二つと言う事で始まったこのプロジェクト。浄土寺の転法輪山から見える尾道の景色とそっくりです。(上:気仙沼、下:尾道)



その後は復興商店街へ。2012 年に頂いたご寄付は、こちらへ届けさせていただきました。復興商店街紫市場の顔役のオノトラさんこと、小野寺さんと、坂本さんが温かく迎えてくださり、大田原さん、湯浅さんに商店街の説明をしてくださいました。復興商店街は、ゴールデンウィークという事もあり、明日から忙しいそうです。復興商店街は市内に3カ所あります。現在の店舗はあくまでも仮設のものなので、かさ上げされないと、元の場所に店舗を建てる事が出来ません。長く続く仮設営業の計画と、現在置かれている問題との向き合いと、現在の経営と、イベント開催、誘致を同時進行していかなければいけないので、大変だと思います。

しかし私の目から見ると、色々な所にある商店街より、どこよりも活気があり、明るく、前向きで

笑いの絶えない場所のイメージ。「**困難に立ち向かい、笑顔忘れずに頑張ってる場所**」へ足を運ぶ事により、こちらまで元気がもらえます。美味しいものも沢山、復興商店街は日本が誇れる元気になれる場所です。ぜひ足を運び、現地の皆さんの声を聴いてください。そこには商品、商材以外に人情があり、活気があり、優しさがあり、エネルギーがあります。

経営に関してはこれからが大事。かさ上げの工事が本格的に始まる時まではどうしても、経営をしていかなければいけないので、観光客対象だけの商店街ではなく、地元にも必要なものをリサーチし、つつい買ってしまおう、あそこに行けばとりあえず何かがあると言われる場所にしていくのもこれから大切な事かとも思います。一日目は軽く顔を出す程度で、改めて二日目に来る約束をしました。



少しホテルで休んでいただき、夜は気仙沼ホルモンのじゃんじゃんへ。

気仙沼ホルモンは、私もその食べ方に驚いたのですが、まずは豚のホルモンを焼き、キャベツのせん切りの上に乗せてウスターソースで食べる。ホルモンのコクとうまみを残しながら、余計な脂はキャベツが相殺してくれる。なので、いくらでも食べれてします、上手なホルモンの食べ方です。何度か連れてきていただいたこのジャンジャンは、とてもお気に入りのお店です。



(写真は前々回の気仙沼)



今回は気仙沼視察という目的があった事もあり、震災当時の様子を沢山聞く事が出来た。

海に浮かんでいる「火が付いてる瓦礫」が流れてきて、二週間燃え続けた事や、火が見えなくても暗闇の中空だけは赤かった事や、情報が届かないので逃げてきた人の話を聴いて想像する事しか出来なかった事や、当時の地獄絵図のような話を聞いたが、そういう話をあっさり話すのである。

時折笑いも交えながら話すくらいだったが、やはり想像するだけでも身震いがする。しかも、当時は東北の冬だ。これからは、共にその大きなプラスを作っていきたいと強く思います。ここに来たら誰もが被災地と言う言葉に違和感を覚えると思います。ここは、日本の今後の防災の見本となり、日本で一番進んだ街になると思うので、先進予定地です。

そんな事を今回も思いながら、就寝です。

二日目

この日はく予定。私も初めてなので、楽しみにしていた。大島は、人口約 3000 人の気仙沼の水道の向こう側の島。尾道でいう、向島である。

昔からの言い伝えで、「大津波が来たら、島は三つに分断される」というものがあつたのだが、半信半疑で受け止めていた人も多かったようだ。なのに今回の震災で大島を襲った津波は、20メートルくらいの大津波で島を分断した。言い伝えは本当だった。昔の人は子孫を守る為にちゃんと知識を伝えようとしていたのだ。大島の被害もひどく、島のシンボルである龜山は火災に見舞われ、真っ黒で渦を巻く激流に四方を囲まれて地獄絵図だったという。

そんな大島では、この地震が来た時間帯は金曜日で大人達はほとんど気仙沼に働きに出ていたという。なので、火災などは大島の子供達が火を消し、御高齢の方々と共に島を守ったという事を聞いた。

そのお陰で神社が全焼せずにすんだらしい。島に帰れない大人達は気が気じゃなかった「お互いに辛い一週間」を過ごしていた。子供たちが守った島。その大島小学校へ子供たちに会いに行ってきた。

大島小学校の児童数は81名。GW だから全員には会えなかったが、一部の子供たちは元気よく野球をしていた。

PTA 会長の小野寺さんが、大田原さん、湯浅さんをお子たちにご紹介してくださった。

大島の子供たちは、実は尾道青年会議所の村上忠正君率いる復興委員会が尾道での海フェスタでのディズニーパレードに呼んでくれた事もあり、この子供達の2人が尾道に来た事があった。私はその時はひまりと一緒にライブをしていて、大島の子供たちが会いに来てくれた事を覚えている。



子供たちの前でメッセージを送る大田原さん、湯浅さん御夫妻。



尾道に来てくれた二人。元気いっぱい、こちらが元気をもらった。またぜひいつか尾道に来てほしい。



その後は、小野寺さんに大島を案内していただいた。印象深かったのは、大島に咲く緑の桜。なんと桜の葉が緑なのです。御衣黄(ギョイコウ)」という種類で珍しいそうです。この桜はソメイヨシノの後に咲くとの事です。

夏には子供たちが遠泳大会をしていて、なんと往復 700M も泳ぐとの事。これにはびっくりです。これだけたくましい子供たちだったからこそ、震災の時も島を守る事が出来たのでしょう。

その後は、竜舞崎へ。大島南端にある岬で、鳴り砂と言われる独特の音がする場所でした。石がごろごろとしているのでその石を波がさらい、そして戻す音がとても美しく、印象的でした。大島には、亀山、乙姫が流れついたという乙姫窟、亀が浦島太郎を乗せてたどり着いたと言われる亀島、そして竜舞崎があり、浦島太郎の伝説があるとされているようだ。そんな浪漫も感じる事が出来るような場所でした。

島には、県道が通っていて、鹿折と大島の間に架橋が計画されているそう。今回の震災でも大島には離島が故に随分と救出に時間がかかったのもあるし、きっとこの橋は必要だと思う。今回気仙沼-大島線のフェリーに乗って気になったのは目の前の島なのに20分も乗船時間が必要な事だ。

◆気仙沼-大島フェリー(運行距離 7.5 キロ)

一時間に1本。

乗船料金は 400 円(子供 200 円)

原付:600 円

カーフェリーだと **5M 未満で 2500 円**。

◆尾道-向島(運行距離 0.3 キロ)

平日なら 5 分~10 分間隔

乗船料金は、100 円

原付:110 円

車だと、運転手一人含めて **5M 未満で 130 円**。

直線距離など詳しい事はわからないが、これだけ同じような景色で目の前にあるように見える島なのに、そこまで辿りつくには**尾道と比べてしまうと**時間、距離、料金全てに労力がかかるように思われた。なのできっと架橋は必要だと感じた。

しかし、整備に時間がかかるので開通予定は 2018 年とまだまだ先の事ようだ。亀山から見る気仙沼の景色を眺めながらそんな事を考えていたが、小野寺さんが手造りの絶品草もちを差し入れにくださってその考えが一気に吹き飛び、その作りばかり考えていた。

大島には以前にも触れたが、もう一つ不思議な話があり、尾道の因島と大島は実は繋がっているのである。因島にも、大島にも村上姓が多く、実は両島とも、**村上水軍の末裔が多いという驚きの事実があったのである**。

これだけ離れている場所に、遠い先祖同士が実は繋がっていて、それが私の耳に入ってくるという事自体が不思議な話だ。この話は気仙沼の水産加工会社の春日雄一さんから聞いた話で、本当に村上の性が多い事に驚いた。しかも、今回の湯浅先生のお母様が村上の姓で、村上水軍の関係だというから更に驚いた。最後は、小野寺さんと記念撮影して、再会の約束をして別れた。小野寺さんは、笑顔が素敵で、まるで子供の頃から知っているかのような温かい雰囲気を持っている人だった。



大島に帰る途中では、フェリーが乗船客の「かっぱえびせん」を狙い、一緒についてくる。すごい数だ。私も餌を買いにいったのだが、以前に大阪に行った時に大阪の三角公園でお客の食べ残しのたこ焼きソースを食べすぎたのか、そこにいた鳩がほとんど羽根が汚く、ばさばさで動きもおかしかったのを覚えているので、なるべく味の少ない健康的な昔ながらのクッキーを選び、彼らに与えた。私の所属するがんこ屋は、身体に優しい食材を扱う会社なので、彼らにも敬意をこめたつもりだったが、彼らはそんな気持ちとは裏腹に何度も私の指ごと加えていったので、船を降りる頃には指がひりひりしていた。



◆復興商店街紫市場 旭寿司

その後は気仙沼に戻り、復興商店街でランチ。嬉しい旭寿司だ。ここのお寿司は本当に美味しい。お寿司好きの自分にはたまらない。



この笑顔になれる場所。毎回ここに来るのが楽しみです。



◆陸前高田 奇跡の一本松

その後は、一向は陸前高田へ。陸前高田は2011年4月に私がHappy Japan Project仲間と一番最初に入った東北の地だったので、思い入れも深い場所。あの時は、一番ひどい時に現地入りしたので壊滅した景色、匂いなど、衝撃的だった事を思い出します。



久しぶりに行ったら、なんにもなくなっていました。果てしなくすっからかと言えるくらい何もなくなっていました。陸前高田は海から平坦距離が長く、高台がないのでとても危険な場所を感じた。逃げる距離が長すぎです。この場所こそ、高台や逃げ場を作る事が大事だと思った。奇跡の一本松は、見に来ている人が多かった。ここで感じたものは「残すべき物」。鹿折の巨大船は撤去する事になったが、賛否両論だという事。あれを見たら当時を思い出すと言う意見が多かったとの事。それを聞き、広島原爆ドームが頭をよぎった。あれ自体も、残すべきか撤去すべきか相当な意見があったはず。広島は残す道を選んだ。長く遠い未来を見た時に、残すべきか残さないべきかをジャッジするのは難しい事だと思った。

きっと正しい答えというものが存在しないからだ。広島を引き合いに出したのは、ふと思っただけで、実際には「天災によるもの」と「人災によるもの」の違いは大きく、広島が残すとジャッジしたのは、未来への平和を世界に伝え、「二度と人の手によるこゆう事がないように」のメッセージが込められているので、引き合いに出すには全く次元の違う話かもしれない。同じ津波の跡でも、「一本松」を残そうという気持ちは、そこに「信じられないくらいの津波にもじっと耐えた」という、東北人の気質を鏡のように映すもので、未来に伝えたい今の自分たちの気持ちなんじゃないかと、思ってしまった。

後に、気仙沼の亨ちゃんのプログを見たら、鹿折の大型船は維持費に相当な金額がかかるらしく、そして船の構造上そこまで長期間もたないと。そこまでしてやるべきか、今この大変な時にお金の使い道に対しての問題も出ているとの事で現地で賛成している人がほとんどいなかったとの事だ。

民間の意見をきかずに進めているという事も大きな問題だという事だそう。



一同は、そのまま気仙沼に戻る。佐藤由美子さんがもう一つ連れていきたい場所があるとの事。

「どこだろう？」というワクワクを抱えながら到着した場所は素晴らしい所でした。

◆鮎貝家

気仙沼の鮎貝家と言えば、名門中の名門。藤原不比等から続く仙台藩主伊達正宗の筆頭家老の一族で、気仙沼に移住したとの事。鮎貝家 17 代当主の宗房さんのお母様の文子さんが温かく迎えてくださった。

文子さんはその煙雲館を守り続けている方で、地域貢献に積極的に活動されている方だ。気品もあり、でも温かい空気をまとっている方で、名門ながらその

積極的な姿勢は我々にも伝わり、日本家屋の高貴な香り漂う中、色々なお話を聞かせて下さったお話はとても印象的。



鮎貝家には、名を残した人が多く、特に明治の国文学者でもあり、歌人でもある落合直文3兄弟はかなりの実績を残されている兄弟で驚いた。

長男の鮎貝盛徳さんは、気仙沼の初代町長で、明治、大正、昭和の三代にわたり地方自治、地域振興の貢献された方で気仙沼市民会館に銅像が建てられている。

二男の落合直文さんは、あの与謝野鉄幹を門下に持つ有名人。伊勢神宮教院で国学や漢籍を学び、多くの名著を書いた人。その中でも手掛けた日本で最初の辞書と言われる「ことばの泉」を見せていただいた。三男の鮎貝房の進さんも、与謝野鉄幹さんと共に、短歌革新につとめ、その後朝鮮に渡り、学術文化振興に貢献して、朝鮮文化功労章を受けた立派な方だ。



そんな落合直文さんの歌を文子さんが書いて、解り易く説明してくださった。明治の人はロマンティックな方が多いとの事。歌にもとても現れているらしい。色々を見せていただいた中で、印象深かったのがこの一文。

父と母といづれがよきと子に聞けば
父といひて 母をかへりみぬ

子供に「お父さんとお母さんはどっちが好き？」と聞いたら、
「お父さん」と答えながら、母を見た。というもの。

父、母の性格を子供ながら感覚で読み取り、父を立てつつ、「本当はお母さんだよ」という子供の気遣いが伝わる、心温まる歌だった。直文さんの歌がこれでもとても興味が出たのでこれから色々調べてみよう。

この煙雲館。昔の建物なので維持していくのが大変だと思う。これは、気仙沼の宝として街が協力して残していくべき場所だと思った。津波を免れた文化の香りをそのまま残した煙雲館。今後復興と同時に守るべきこの場所の未来も真剣に考えていくべきだと感じた。でも、ふと思ったのはこの場所から見える景色がちょうど津波で壊滅した場所なのだ。古くからずっとこの景色を見て育った文子さんが今毎日この景色を見る気持ちを想うと心が痛む。でも同時にここの場所もこれから良くなっていく。そしてその良くなっていく景色をぜひまた見届けてほしいと強く願った。



◆復興商店街 アッシュヘッドオノトラ

鮎貝家からキングスガーデンに戻る途中で復興商店街に降りてもらい、オノトラさんへ散髪に行った。これも大切ば気仙沼の行事である。オノトラさんは私から見ると、とてもお人よしで楽しくて素晴らしい人なのだが、少々これに関しては損をしているのかなとも思った。なぜならば、美容院はお客様と一對一の商い。小野寺さんは、復興屋台村 気仙沼横丁の事務局長で重要ポスト。という事は、イベントの時は必ず外に出てイベント事のお手伝いをしなければいけない位置。

ん？？という事は、イベントをしている時は商いが成り立たないという事なのである。忙しければ忙しいほど成り立たない。お父様、お母様がされているとはいえ、やはり小野寺さんのお客さんは小野寺さん自身で切ったりするのが理髪店。だとすると、地元に着したお仕事になるので、観光客相手はさほどおいしい商売ではない。でも、外からのお客様を誘致するイベントや、企画で忙しかされているのでよくよく考えてみるとすごい事なのである。先ほども触れたが、本当に気仙沼の事を考え、商店街の事を考えなければ心の底から燃えあがる事が出来ないはずなのである。それをいつも、楽しそうにイベントをされている姿を見ているのでそこに小野寺さんの気持ちと人間性が伝わり、私はどうしてもオノトラに行きたくるのである。その後はキングスガーデンに戻り、由美子さんに取材をした。この取材内容は後の資料に使うものである。動画3点撮らせていただいた。その中で由美子さんのお話はこれからの尾道と気仙沼の関わり方に大きく作用するものだと思う。

支援のカタチは様々だけど、これからは国的な事より人的支援で、若者などのフットワークを支える事も重要。相互が長く協力出来るシステムが必要と考える。

2011年に由美子さんがお世話になってる人からアドバイスを頂いた。支援には、第一の波、第二の波、第三の波が来る。その第三の波を大切にしないと。の事だ。

第一は、救援や医療、第二はNPOやボランティア、そして第三の波が、今の尾道仲間のように長いスパンを考えてかかわろうとする人達の事だ。そうゆう人達がこれからの気仙沼を支えてくれる人だと言う事をその方に教えてもらったそうだが、その時はまだ2011年で由美子さんはそれどころじゃない時だったそうでピンとこなかったらしい。でも、今になってその言葉の意味が解ると言っていた。

気仙沼は民と官の距離感が近い街。それぞれが、協力し合い、スピード感がある街なのが印象。

それは尾道にも似たものを感じる。そんな街がお互いに自然な形で手を繋ぎ、歩いていけたら何か大きな事が起こるのではないかと感じる。由美子さんはその船長でもあり、大きく舵をとれる人なんだと思う。

尾道にも、大田原さん、湯浅さんを始め、浜中先生、宇根本さん率いるてっぺん同盟、尾道青年会議所、ロータリークラブ、森田直幸(尾道繋がり)や、がんこ屋ファミリーなど沢山の協力的なメンバーがいる。東京にも富司純子さんやHappy Japan Projectや、久岡さんや、私の芸能界の心友をはじめとするそうそうたるメンバーがいる。何かが起こりそうな予感だ。

◆はちみつ寄贈

その後は、今回の重要任務である「はちみつ寄贈」である。尾道の高原九年さんから預けていただいた尾道産のはちみつをお渡した。どこに寄贈するのが一番いいかは、由美子さん、山崎さんが考えてくださるとの事で、もう少し時間がかかるが、必ず最適な場所へ届けてくれると思う。とても楽しみだ。



◆夕食 気仙沼 福よし

さてさて、夜になり、会食の時間だ。今回はとても楽しみにしていた気仙沼の名店「福よし」さん。美味しんぼで日本一の焼き魚と言われたお店です。この吉次という魚の焼き魚が絶品！喜知地とも書き、キンキの事です。これは驚きの美味しさでした。焼きあがりまで40分もかかるそうです。お刺身盛りもとても美味しかったです。

そして、今回の会食のメンバーがとても豪華。気仙沼の顔とも言われるすごい方々だった。

気仙沼市議会議長 臼井義人さん。

気仙沼南ロータリークラブ 理事 小山清之さん。

社会福祉法人キングスガーデン 山崎正信さん、佐藤由美子さん、佐藤洋美さん。

そして、後で駆けつけてくださった男山酒造の菅原昭彦さん。気仙沼のそうそうたるメンバーである。

大田原さん、湯浅さんは私もやっとお連れ出来た大切なお二人だったのでこの会食はとてもうれしかった。今回は卓話というのが目的でもあったので、ちゃんとした話を集中して聞いたので良かった。臼井議長も気仙沼には問題点が2つあって、やはり一つは地盤沈下の問題。後は土地の問題である。

地盤沈下については、一日目で触れたので割愛させていただくが、土地の問題とは色々存在する。やはり平台が津波でやられてしまっているの、土地がない事。土地が足りないという事。高台に行くには山を切りくずさなければいけないという現状があるとの事。以前聞いた事があるが、高台移転に関しては、宅地のインフラ整備までは国が負担するが、その建築費は個人負担。元々の土地を売りたいくても、行政が買い取るには宅地のみだから庭や畑は買いとってはくれない。家建立の資金工面にも響いてくる話だ。

いずれにせよ、進んではいるが次から次へと新しい課題が降りかかってくる。



気仙沼と尾道の関わり方で今「食」での関わり方が話題に上がっている。(由美子さんと二人で)これは、気仙沼と、尾道が「スローフード」というキーワードにこれから繋がっていけばという案だが、少々時間はかかるかもしれないが、未来の絵が描けるいい話だと思う。尾道にも元気の良い人が沢山いるので、北前船の文化の時のような新しい海のロードを作ってもいいのではないかと思う。

気仙沼の特産の「メカジキ」のお好み焼きみたいに、相互の文化を取り入れたメニューが出来る日も遠くないと感じる。



最後には、福よしの大将にお話しを聞けたり、とてもいい時間を過ごす事が出来た。

もっともっと深く書きたいのだが、大量のがんこ屋業務が残っているのもう終盤に入らせていただく。

私の身体があと三体あればいつも思う。がんこ屋、尾道音楽、東京音楽、Happy Japan Project、気仙沼、広島事にそれぞれ自分がおもいきり出来たらと思うが、今はがんこ屋の業務が精一杯。

自分の心が喜ぶ活動を継続させていくには資金はどうしても必要。ちゃんとした生活レベルがないと、やりたくてもやれない。なので、自分は今のこのがんこ屋をしっかりと盛り上げて、しっかりと働く事が大事。

そして、がんこ屋を大きくして、社員は自分と同じ気持ちを持つ仲間を。そしてある程度の組織力を持って進んでいく事が必要と思える。何度も気仙沼に足を運ぶとそんな気持ちも強くなる。

気仙沼で浮かんだ。がんこ屋の社訓。

「人に喜ばれる事をしよう 人に喜ばれる会社になろう」

商いには一番大切な事で、個人で常にそういう気持ちのある人が集まったら、会社もおのずとそうなるという意味だ。単純だが、私の人生では一番大切な事だ。

この場所にくると人生を教えてもらえる。それぞれの場所に戻り、また元気をもらいにいく。もらってばかりだが、とてもいい関係が出来たと最近つくづく感じる。そんな想いを胸にちよい二次会にいき、帰ってぐっすり寝た。

最終日は、朝7:00 出発で一ノ関へ。一ノ関から仙台にいき、順調だったが、仙台ー広島行きの飛行機が飛行機の故障で欠航。急遽福岡空港まで飛ばされ、そこから新幹線で広島、そして車が置いてある広島空港まで戻ったので、10時間の移動時間になってしまった。

大田原さん、湯浅さんと三人の旅はこんなハプニングがありつつも、一生忘れられないものになった。

私が敬愛するお二人なので、お連れ出来たのはとても光栄でうれしかった。まだお連れしたい人がいるので、徐々に思っている。こうして輪が広がり、喜びも苦しみも共有出来る仲間が増えてそのエネルギーが大きな力を産む事がとても楽しみだ。

また帰ってきます!気仙沼ファミリーの皆さんありがとうございました!

